

晩年時代のゲーテと「親和力」の世界

後 瀧 雅 生

昭和49年9月30日 受理

Goethe の長編小説「親和力」は1809年に発表されるやセンセーションをまきおこし、主として当時の道徳的観点より否定的批判を受け、あるいは誤解され、あるいは中傷され、Goethe はこの作品に対する理解者を殆ど見出すことはできなかつたようである。そしてそれ以後この作品は永い間にわたって一般にはあまり注目されることも無く、Goethe の他の作品群の中に埋れて正当な評価が得られなかつた。今日では「親和力」は Goethe の多くの作品の中で最も完成された作品の一つであるばかりでなく、最も重要な作品の一つとしての評価を得ているのであるが、従来のこの作品に対する過少評価の歴史は、現在ではむしろ不可解であるとさえ言えるであろう。もっともこの作品が発表当時の社会的倫理的通念をはるかに越えた内容をもっていたことを考えるならば、当時のこの作品に対する否定的な批判や誤解はむしろ当然の成り行きであったと言えるかもしれない。「親和力」が再評価され、この作品のもつ重要性が理解されるようになったのは、主として第二次世界大戦後のことである。そしておびただしい数の研究が発表された。勿論これには十分根拠があると考えられる。第二次大戦後この作品の再評価を促したのは、一つにはそれらの研究が、例えば Mittler や Charlotte についての従来の解釈に否定的であることから理解できるように、第二次大戦という未曾有の体験によって、近代ヨーロッパの文化に対する懐疑を抱いた人々が、この作品の中に、Goethe の近代ヨーロッパの合理的理性のあり方に対する批判と人間存在の根源に迫る省察を見出したことがその背景としてあるように考えられる。

ところで、戦後の多くの研究がこの作品のもつ意義を等しく認めているのであるが、その解釈が多様をきわめているのも事実である。例えば、Trunz は従来の研究を批判的にこう要約している。 > Die Interpreten umkreisen das Überpersönliche dieses Romans — sie nennen es das „Gesetz“, die „Idee“, das „Schicksal“, sie suchen es dialektisch zu spalten in „Trieb“ und „Vernunft“, in „Elementares“ und „Geistiges“, in „Leidenschaft“ und „Ehe“, in „Notwendigkeit“ und „Freiheit“, in „Dämonisches“ und „Heiliges“; aber der Roman scheint ihrer zu spotten. <¹⁾ これらの解釈は決して根拠の無いものではなく、むしろ部分的には十分妥当性があると考えられるにもかかわらず、この小説の全体を捉えているとは言えない。この作品をある一つの概念に還元したり、あるいは二元的要素の対立に還元するという解釈によっては、多層的な構造をもつこの作品を単純化するのみで、この作品の全体性を把握することはできないであろう。 >der Roman scheint ihrer zu spotten< という Trunz の批判は正しいと言わねばならない。

この作品の解釈の困難さとその多義性がこの作品の多層的な構造に由来しているのは言うまで

もないであろう。この作品についての Goethe 自身のコメントもそのことを仄めかしている。例えば、Goethe は Zelter 宛の手紙（1809年8月26日）の中でこの作品を覆っている >ein durchsichtiger und undurchsichtiger Schleier<²⁾ について述べ、また Eckermann との対話（1830年2月17日）の中で、>In dem Roman ist kein Strich erhalten, der nicht erlebt, aber kein Strich so, wie er erlebt worden ist.<³⁾ と述べている。Goethe 自身のこのようなコメントからも窺えるように、彼はむしろ意識的にこの作品の意図を隠そうとしているようである。そしてこの作品構造そのものにも彼のそのような意図を反映して、この作品を多層的で難解なものにしている。したがって、「親和力」の解釈に際しては、作品構造についての十分な考察が必要であろう。

「親和力」が綿密な計算のもとに構想され、Goethe の他の作品には見出されないきわめて「抽象化」された構造を有していることは、一読して容易に理解できることである。

この作品世界が展開される時は、男爵 Eduard とその妻 Charlotte の住む彼らの邸内生活に殆ど極限され、ここを訪れる他の二人の主要登場人物 Ottilie と Hauptmann, そして彼らと直接の関係をもたない数多くの人々との人間関係や人間模様が対比的にえがき出されている。

四人の主要人物のうち一人 Eduard は、最も意欲的で実り豊かな活動のできる壮年でありながら価値のある活動の場を持たず、専ら邸内での庭作りをあたかも真の意味ある仕事であるかのように自分に思いこませようとする情念的な人間としてえがかれている。他方同じく主要人物のうち一人である彼の妻 Charlotte は、合理的理性そのもののような存在であり、彼女は夫と二人だけの平穏な生活を望むあまり外界との接触を極端に斥けようとする。そして Eduard は妻の希望を入れて閉ざされた世界に隠居生活をしているのであるが、本来真の生活をもたない彼らは常に内部崩壊という危機にさらされている。そこに他の二人の主要人物 Ottilie と Hauptmann が加わり、彼らの親和力関係と彼らの世界の秩序の崩壊過程がえがかれる。この作品にはこのように外界から閉ざされた世界での彼ら四人の生活が微細にわたりえがき出される。そこに展開されるのは、いわば人間性の丸裸にされた姿であり、そこには人間の根源的な姿が浮き彫りにされる。さらに作者は、これら四人の主要人物と並行してこの作品の筋とは直接の関係をもたない数多くの人物やエピソードや様々な形象を対比的に織りこみ、四人の主要人物の存在のあり方を鮮明にしている。

このような作品構造のあり方に作者のイロニーシュな姿勢を読みとることができるであろう。Goethe のイロニーシュな姿勢は、彼の晩年時代の作品の基調をなしていると考えられるのであるが、この作品では無数の運命的事象がそれら四人の主要人物に影のようにつきまとい、彼らの運命を予示し決定づけるものとして形象化されるとともに、この同じ運命的事象を通して彼らの存在がイロニーシュに批判されている。

「親和力」には多くのイロニーシュな運命的な事象が形象化され、この作品の世界の赤い糸になっている。それ自体はこの作品の主要なテーマではないが、この作品を理解する場合に見落してはならないものであると考えられる。

この作品における運命的な事象とは具体的にはどのようなものであろうか。その典型的な例を挙げるとするならば、次のようなものを指摘できるであろう。Eduard と Ottilie に共通に存在する偏頭痛（I・5）、家の定礎式における壊れないグラス（I・9）、グラスに記されているEとOの文字（I・9）、Eduard と Charlotte の「運命的な夜」（I・11）、生れた子供の容貌（II・11）、子供の事故死（II・13）等を挙げてよいだろう。これらの事象はこの作品世界にあっては運命的なものとしての機能をもっているのであるが、これらは本来その生起を人間の意志では左右することのできない偶然的事象である。

「親和力」におけるこれらの偶然的事象は、運命の予徴（Zeichen）として、また運命のイロニイを示すものとして機能し、この作品に独特の性格を与えている。ところで、偶然的存在は近代ヨーロッパの理性の主要な対象にはなり得なかったものであるが、Goethe が偶然的事象を効果的に形象化しているということはきわめて注目すべきことであると考えられる。この作品において Goethe が偶然的事象を縦横に形象化し得たのは、Goethe 自身にそれらに対する深い関心と洞察があったからであろう。また偶然的事象に対する着目は、Sturm und Drang 期や古典主義期には殆ど見出されないことであって、晩年時代の Goethe の思想と密接な関連をもっていると考えられる。

「親和力」に見出される運命的なものとしての偶然的事象について考察するにあたって、偶然的存在の一般的な性質について理解しておく必要があるだろう。偶然的存在は、ある人間の行動や存在とは無関係な別の因果関係の結果として生じるものであって、それ自体独立したものとしては特別な意味を有しているわけではない。偶然的存在の特質は次のような点に認められるであろう。「必然がその本質の中に過去を担っているに反して、偶然はその本質の中に過去を欠いている。偶然は過去なき現実として現在の瞬間に迸り出るものである。偶然と可能との相違も、可能が未来への憧憬であるに反して、偶然は現実である点に存している。」⁴⁾ だからこそ偶然的事象はその形態によっては、直接の因果関係が無いにもかかわらず、偶然にしかも不意に人間を襲いその運命を左右したり、人間存在のあり方を照し出して見せたり、あるいは暗示を与えたりして、我々人間に有無を言わず影響を及ぼす場合がある。この意味において偶然とは、異なる因果系列をもつ二つの事象の交叉、「独立なる二元の邂逅」と定義づけることができるであろう⁵⁾。この小論で問題にしている偶然的事象とは、このように人間の行動や存在と係ってくるものとしての偶然的事象である。

この小論においては、「親和力」において形象化されている様々な運命的な事象を偶然的事象としての観点から捉え、この作品においてそれらがどのような構造を有し、どのような機能を有しているかを考察してみたい。

I

まず「親和力」における偶然形象を、運命の予徴としての偶然形象と運命のイロニイを示すものとしての偶然形象に大別して捉え、それらを記述し、考察してみたい。もっともそれらの偶然

形象の分類は便宜的なものであって、実際には両方の機能を兼ね備えている場合が少なくない。

この作品では、その発端（I・4）においてこの作品の主要登場人物達が夕食後の談論の中で偶々化学反応の現象の一つとしての親和力作用に言及する場面があるのであるが、一見何の変哲もないこの会話は実はこの作品の展開の重要な契機になっているということが、この作品を読み進むうちに明らかになってくる。この会話に加わった四人の主要登場人物達は、あたかも暗示にかかったようにその化学反応と同じ結合離反をするというアレゴリーッシュな展開を見せるのである。すでにここにおいて作者は偶然的事象の人間に及ぼす効果を大胆に技巧として用いている。

この親和力作用という化学現象についての話題と後の四人の人物達の親和関係の推移は、この作品世界の中では偶然の関係であると言える。そしてこの偶然の関係を通して、彼ら四人の運命が予示されているわけである。この小説のもつこのように技巧的な構造そのものにすでに作者の Scherz とともにイローニッシュとも言うべき姿勢が見出されると考えられる。このようにして展開されるそれら四人の人物達の親和関係は、それ以後彼らに影のようにつきまとい次々に現われる偶然的事象を通して予示され、また彼らの親和関係が運命的なものであるということが明らかにされてゆくと同時に、同じ偶然的事象を通して彼らの存在のあり方がイローニッシュに批判されていると考えられる。そこで、この作品中の幾つかの典型的な偶然形象をとりあげて考察を試みてみたい。

この作品における最も主要な人物 Eduard と Ottilie との運命的な親和関係は、まず次のような偶然形象を通して予示される。Eduard は、Ottilie の在学している寄宿学校の助教師からの彼女についての報告の中で偶然にも彼女には左偏頭痛があるのを知って、彼自身にもある右偏頭と比較しながらこう述べている。

＞„Es ist doch recht zuvorkommed von der Nichte, ein wenig Kopfweh auf der linken Seite zu haben; ich habe es manchmal auf der rechten. Trifft es zusammen und wir sitzen gegeneinander, ich auf den rechten Ellbogen, sie auf den linken gestützt und die Köpfe nach verschiedenen Seiten in die Hand gelegt, so muß das ein Paar artige Gegenbilder geben.“⁶⁾

邸内に新築される家の定礎式の行事の場面には次のような偶然形象が見出される。

＞Und so leerte er ein wohlgeschliffenes Kelchglas auf einen Zug aus und warf es in die Luft; denn es bezeichnet das Übermaß einer Freude, das Gefäß zu zerstören, dessen man sich in der Fröhlichkeit bedient. Aber diesmal ereignete es sich anders: das Glas kam nicht wieder auf den Boden, und zwar ohne Wunder. ……
 …… Dort hinauf flog das Glas und wurde von einem aufgefangen, der diesen Zufall als ein glückliches Zeichen für sich ansah. Er wies es zuletzt herum, ohne es aus der Hand zu lassen, und man sah darauf die Buchstaben E und O in sehr zierlicher Verschlingung eingeschnitten: es war eins der Gläser, die für Eduarden in seiner Jugend gefertigt worden.⁷⁾

このグラスに記されている E と O の文字は Eduard と Ottilie の運命的な結びつきを予示する偶然的事象であるが、同時にこのグラスが壊れなかったということは彼らの親和関係の不吉な運命を予示する偶然的事象としても形象化されているわけである。

また作者は、Eduard が Charlotte の目を避けるため手紙によって Ottilie との接触を保とうとした時に生じた一つの偶然的事象を、彼の陥っている状況を照し出す一種の啓示として形象化している。

> Ottilie versäumte nicht, ihm zu antworten. Ungelesen steckte er das Zettelchen in die Weste, die, modisch kurz, es nicht gut verwahrte. Es schob sich heraus und fiel, ohne von ihm bemerkt zu werden, auf den Boden. Charlotte sah es und hob es auf und reichte es ihm mit einem flüchtigen Überblick. „Hier ist etwas von deiner Hand,“ sagte sie, „das du vielleicht ungern verlörest.“
 …… Er war gewarnt, doppelt gewarnt; aber diese sonderbaren, zufälligen Zeichen, durch die ein höheres Wesen mit uns zu sprechen scheint, waren seiner Leidenschaft unverständlich; <⁸⁾

この作品においては Eduard と偶然的事象の関係が特に微細にわたってえがかれていると言える。Eduard はあらゆる偶然的事象のうち自分と Ottilie との結びつきを示す Zeichen を、Fügung をさえ見出している。不吉な運命を予示しているあの壊れなかったグラスに対しても、また「運命的な夜」の結果として生れた子供の容貌に Ottilie の姿を見出したことに対しても、さらにその子供の事故死に対してさえ、自分と Ottilie との運命的な結びつきを示す Fügung を見ようとする。このように作者は、Eduard と偶然的事象との対応関係を通して、Eduard のデモーニッシュな存在のあの方を明らかにしてゆくと同時に、Eduard の存在のあり方を仮借なきまでに冷徹にイローニッシュな批判にさらし出していると言える。

II

これまで主として「親和力」に見出される様々な運命的な偶然的事象の幾つかの典型を指摘してきたのであるが、ここではこの作品中の最もイローニッシュな偶然形象を記述し、考察してみたい。「運命的な夜」(I・11)と、その「運命的な夜」の結果として生れた Ottilie と Hauptmann の姿を宿している子供 (II・11) と、そしてその子供の事故死 (II・13) という運命的な偶然形象の連鎖を通して、作者は四人の主要登場人物に対して過酷とも言えるほどイローニッシュで倫理的な批判を加えている。

Eduard はある夜気紛れから Charlotte の部屋を訪ね、彼女との一夜を過した。しかしこの時彼が共に過したのは、彼の心の中では、彼の妻ではなく Ottilie であった。しかも彼の妻 Charlotte もまたこの時思い浮べていたのは、夫ではなく Hauptmann であった。この一夜についてはこう記されている。

> In der Lampendämmerung sogleich behauptete die innre Neigung, behauptete die Einbildungskraft ihre Rechte über das Wirkliche: Eduard hielt nur Ottilien in seinen

Armen, Charlotten schwebte der Hauptmann näher oder ferner vor der Seele, und so verwebten, wundersam genug, sich Abwesendes und Gegenwärtiges reizend und wonnevoll durcheinander. <⁹⁾

Eduard と Charlotte が共に過したこの一夜は、彼らにとってイローニッシュな「運命的な夜」であったことが、やがて生れた子供の形姿を通して明らかにされる。

この「運命的な夜」の結果として生れた Eduard と Charlotte の子供には、Ottilie と Hauptmann の姿が認められたことが記されている。

> Man sah in ihm ein wunderbares, ja ein Wunderkind, höchst erfreulich dem Anblick, an Größe, Ebenmaß, Stärke und Gesundheit; und was noch mehr in Verwunderung setzte, war jene doppelte Ähnlichkeit, die sich immer mehr entwickelte. Den Gesichtszügen und der ganzen Form nach glich das Kind immer mehr dem Hauptmann, die Augen ließen sich immer weniger von Ottiliens Augen unterscheiden. <¹⁰⁾

この子供の形姿には Eduard と Charlotte に対する作者の厳しい倫理的批判を見出すことができる。

そしてこの子供は後に Ottilie の過失によって事故死を遂げる。子供の事故死というこの運命的な偶然的事象に対して、四人の主要人物は、それぞれ自己の存在のあり方に従った個性的な対応の仕方を示している。この対応の仕方を通して、これらの人物の一人一人の存在のあり方が暴露され、イローニッシュな批判にさらされるのである。この点に関してさらに具体的に考察してみたい。

Eduard は、子供の死を自分と Ottilie との結びつきを実現するための Fügung であると理解している。ここには Eduard の理性的な認識をも斥けようとするデモーニッシュな存在が浮き彫りにされている。

> Er wußte bereits von dem Unglück, und auch er, anstatt das arme Geschöpf zu bedauern, sah diesen Fall, ohne sichs ganz gestehen zu wollen, als eine Fügung an, wodurch jedes Hindernis an seinem Glück auf einmal beseitigt wäre. <¹¹⁾

Charlotte は、この運命的な子供の死とそれによって Eduard との絆が断ち切られたことを、人間とは全く無関係な外的な力としての運命の仕業とみなして離婚に同意するのであるが、彼女はこの運命的な偶然的事象を人間の根源的な姿を捉え直すための契機とすることもできず、また自己の合理主義的な理性のあり方そのものに問題があるにもかかわらず、それを洞察し得ずこう述べている。

> „Ich willige in die Scheidung. Ich hätte mich früher dazu entschließen sollen; durch mein Zaudern, mein Widerstreben habe ich das Kind getötet. Es sind gewisse Dinge, die sich das Schicksal hartnäckig vornimmt. Vergebens, daß Vernunft und Tugend, Pflicht und alles Heilige sich ihm in den Weg stellen: es soll etwas geschehen, was ihm recht ist, was uns nicht recht scheint: und so greift es zuletzt durch, wir

mögen uns gebärden, wie wir wollen.“ <¹²⁾

Ottillie は子供の死を自己の存在のあり方に対する啓示として受けとめ、この運命的な偶然的事象が „Gesetz“ を知る契機となっており、自己の置かれている状況と自己の存在のあり方を深く洞察してこう述べている。

> “Aber ich bin aus meiner Bahn geschritten, ich habe meine Gesetze gebrochen, ich habe sogar das Gefühl derselben verloren, und nach einem schrecklichen Ereignis klärst du mich wieder über meinen Zustand auf, der jammervoller ist als der erste. ……

…… Eduards werd ich nie. Auf eine schreckliche Weise hat Gott mir die Augen geöffnet, in welchem Verbrechen ich befangen bin. Ich will es büßen; und niemand gedenke mich von meinem Vorsatz abzubringen.” <¹³⁾

Hauptmann は子供の死に対しては何の意味も見出そうとはしない。彼にはこの事件は単なる偶然的な事故そのものだからである。

このように、Goethe は運命的な偶然的事象と四人の主要登場との対応関係をえがくことによって、偶然的事象のもつ様々な形態と機能を明らかにしていると言える。

III

「親和力」における偶然形象は、これまでの考察からも明らかであるように、偶然的事象に対する深い理解に基づいてえがかれていることがわかる。このことは Goethe が偶然的事象そのものに並々ならぬ関心を抱き、鋭い観察をしていたことを示しているように思われる。そして Goethe の偶然的事象に対する関心は、彼の晩年時代の思想とも深い関係があると考えてよいのではあるまいか。彼の晩年時代の思想の核心をなすものを彼は思想詩 „Urworte, orphisch“ に表現しているのであるが、その中で彼は偶然的事象を、常に人間に影のように寄りそって存在するものとして捉えている。

> Die strenge Grenze doch umgeht gefällig
Ein Wandelndes, das mit und um uns wandelt;
Nicht einsam bleibst du, bildest dich gesellig
Und handelst wohl, so wie ein anderer handelt. <¹⁴⁾

しかし彼はあくまでも偶然的事象を、人間につきまとうようにして存在するものであると考えているとしても、一定の存在形式も意味ももたない >ein Wandelndes< として捉えている。彼はそれが確に存在するものと考えているのであるが、それに一定の意味を付与することを注意深く避けている。このことは重要であろう。もし偶然的事象に一定の意味を認めようとするならば、一種の宗教への接近、あるいは迷信への接近が生じるであろう。だが Goethe が迷信から程遠いことは、この作品における Eduard の形象に見られるイローニッシュな批判からも明白であると言える。

本来偶然的事象そのものの意味は、人間の理性による認識の及ばない性質のものである。それ

にもかかわらず、「親和力」において、また „Urworte. orphisch“ においても明らかであるように、彼は偶然的事象に深い関心を寄せていたことがわかる。Goethe にとっては、人間が偶然的事象そのものの客観的な意味を知ることにはできないとしても、偶然的事象が人間にとって無視し得ないものとして存在し、相対的ではあるが人間と深い係りをもつものとして捉えられていたようである。そして偶然的事象と人間の関係は常に理性に基づくものでなければならないことを、また偶然的事象は何らかの事態に対して理性的判断ないし根源的省察を促す契機になり得るものであることを、「親和力」の世界にえがかれている偶然形象は示している。

注

- 1) Goethes Werke, Hamburger Ausgabe. Bd. 6, a. a. O., S. 654 Z. 15ff.
- 2) Goethes Briefe, Hamburger Ausgabe. Bd. 3, a. a. O., S. 107 Z. 26ff.
- 3) J. W. Goethe, Gedenkausgabe, Züricher Ausgabe. Bd. 24, a. a. O., S. 395 Z. 29ff.
- 4) 九鬼周造著「人間と実存」中の「哲学私見」126頁参照。
- 5) 九鬼周造著「偶然性の問題」148頁参照。

偶然性の問題は本来哲学の対象であると考えられるのであるが、この問題についての体系的な考察はきわめて少ないようである。その中の一つである九鬼周造の「偶然性の問題」はこの問題に関する洞察に満ちた体系的考察を示す数少ない文献の一つであると考えられる。この著作の中で偶然性について述べられている主要な部分を参考までに記しておきたい：>いづれにしても偶然は遭遇または邂逅として定義される。偶然の「偶」は双，対，並，合の意である。「遇」と同義で遇ふことを意味している。偶数とは一と一とが遇って二となることを基礎とした数である。偶然の偶は偶坐の偶，配偶の偶である。偶然性の核心的意味は「甲は甲である」いふ同一律の必然性を否定する甲と乙との邂逅である。我々は偶然性を定義して「独立なる二元の邂逅」といふことが出来るであろう。<

- 6) Goethes Werke, Hamburger Ausgabe. Bd. 6, a. a. O., S. 280 Z. 27ff.
- 7) Bd. 6, a. a. O., S. 302 Z. 36ff.
- 8) Bd. 6, a. a. O., S. 330 Z. 33ff.
- 9) Bd. 6, a. a. O., S. 321 Z. 23ff.
- 10) Bd. 6, a. a. O., S. 445 Z. 21ff.
- 11) Bd. 6, a. a. O., S. 461 Z. 33ff.
- 12) Bd. 6, a. a. O., S. 460 Z. 17ff.
- 13) Bd. 6, a. a. O., S. 462 Z. 24ff.
- 14) Bd. 1, a. a. O., S. 404 Z. 15ff.

Goethe は晩年時代の思想の核心とも言うべきものを、彼の晩年時代の思想詩“Urworte. orphisch”(1817)に表現している。彼はこの中で偶然的事象(Das Zufällige)をとりあげているのであるが、彼はそれを > ein Wandelndes, das mit und um uns wandelt < と規定するのみで、その人間に及ぼす意味については言及していない。またこの詩についての彼自身の注釈においてもこのことについては注意深く避けているのであるが、すでにこの小論において考察してきたように、偶然的事象の多様な形態と機能を形象化している彼の晩年時代の作品「親和力」(1809)を、„Urworte. orphisch“中の„Das Zufällige“の注釈および補足として読むことも出来るであろう。

主要参考文献

- J. W. Goethe, Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche in 24 Bdn. Zürich: Artemis Verlag. 1949.
Goethes Werke in 14 Bdn. Hamburg: Christian Wegner Verlag. 1960.
Goethes Briefe in 4 Bdn. Hamburg: Christian Wegner Verlag. 1965.
Benjamin, Walter: Goethes Wahlverwandtschaften. In: Goethe in XX. Jahrhundert. S. 179—240. Hamburg: Christian Wegner Verlag. 1967.
九鬼周造著「人間と実存」岩波書店 昭和42年(14年).
九鬼周造著「偶然性の問題」岩波書店 昭和42年(10年).

Der späte Goethe und die Welt „der Wahlverwandtschaften“

Masao USHIROGATA

Die vorliegende Arbeit versucht, die Erscheinungsformen des Zufälligen-Bildes und dessen Funktion in Goethes „Wahlverwandtschaften“ in Hinblick auf den späten Goethe zu erfassen.

Der späte Goethe scheint besonderes Interesse für das Zufällige gehabt zu haben. In seinem Gedicht „Urworte. orphisch“, das den Kern seiner späten Anschauung zeigt, schildert er das Zufällige als „ein Wandelndes, das mit und um uns wandelt.“ Und auch schildert er in seinem Alterswerk „die Wahlverwandtschaften“ das Zufällige mit verschiedenen Erscheinungen und Funktionen. In der Welt dieses Romans ist es ein Zeichen des Schicksals und zugleich hat es eine ironische Funktion. Durch das Zufällige-Bild werden die Schicksale von Eduard, Charlotte, Ottilie und Hauptmann angedeutet, aber dadurch werden sie auch ironisch kritisiert.

Es ist sehr interessant, daß er das Zufällige, „das Wandelndes, das mit und um uns wandelt“, in solcher Weise in „der Wahlverwandtschaften“ gebraucht hat. Solches Zufällige-Bild darin würde bedeuten, daß der späte Goethe das Zufällige immerfort bemerkt, scharf beobachtet und großes Interesse dafür gehabt hätte.